

# 近代における感情表現としての涙のレトリック\*

羅工洙\*\*  
gsna@ynu.ac.kr

## <目次>

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1. はじめに             | 2.4 「愛の涙・同情の涙・懐旧の涙」 |
| 2. 近代文学における「涙」の表現様相 | 2.5 「熱い涙・血の涙」       |
| 2.1 「悲涙・哀涙」         | 2.6 「その他」           |
| 2.2 「喜涙・嬉涙・感涙」      | 3. 重複の「涙」の表現        |
| 2.3 「怨涙・口惜涙・後悔の涙」   | 4. おわりに             |

主題語: 近代文学(Literature of Modern)、感情表現(Expression of Feelings)、涙(Tears)、レトリック(Rhetoric)、新語(a New Word)

## 1. はじめに

近代の文学作品を読んでいると、涙と関連する表現が散見される。人間の生活には「喜怒哀楽」の感情があり、それにまつわる適合した語を選び、表現の効果を高めていくのは当然である。涙を表現するときにも、「涙が流れる・涙を流す・涙が出る・涙を出す・涙が溢れる・涙に暮れる・涙を溜る・涙に咽ぶ・涙に濡れる」など色々ある。文学作品には、これらの表現が一般的に用いられている。ただ「涙」と動詞のつながりだけからも、その文における状況はどういう状態であったのか、その雰囲気が分かると思われるのだが、問題は、どのような感情で涙を流しているのかについては、前後の文脈を見ない限り、その具体的な心情がすぐには分からないと思われることである。たとえば、

彼の法師は、此の老人の<sup>なみだ</sup>涙と<sup>とも</sup>與に<sup>ひそひそ</sup>竊々と語る強盜の<sup>あくどやう</sup>悪行を聞いて、(『俠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p.149)

\* 本研究は、2012年度嶺南大学第2次校費支援により作成された。

\*\* 嶺南大学 日語日文学科 教授

の例を見ると、唯の「涙」ではなく「哀涙」を用いることにより、涙を流す登場人物の心情がより明確になる。つまり、同じ涙であっても、「かなしい・哀切」の「哀涙」だということがすぐ分かるわけである。

涙に関しての研究をみると、近代には、柳田国男が『涕泣史談』<sup>1)</sup>で「老若男女を通じて総体に泣声の少なくなって来た時代」と述べている。近代に入ってから、涙の表現のみならず、実際に人が涙を流さなくなっているようである。反面、見田宗介が「明治以後の日本の流行歌の中で、最も多く使われてきた名詞は“涙”」<sup>2)</sup>であるしていることから、音楽の世界でも「涙」は重要な表現手段であったことが分かる。中里理子<sup>3)</sup>は中古から近代にかけて涙を調査しているが、涙の種類については考察されていない。

近代文学<sup>4)</sup>には、涙と関連する表現が種々ある。しかし、近代における涙と関連する先行研究はあまりない。筆者は「紅涙」<sup>5)</sup>の使用状況について、「この『紅涙』は、近世には主に読本に用いられ、用例も少ないのであるが、女性の流す涙という意味用法を持っている。近代、特に明治期には実に多くの『紅涙』の例が見られるが、それ以前に比べ音読みの『紅涙』が大部分を占めている点が異なる」点と、以前の時代に比べ「必ずしも女性専用のものであったかといえそうでもない。特に戦争文学で痛切の思いを表わす涙として男性も『紅涙』を流している。また、少数ではあるが評論・感想文には男性・女性を問わない中立的な表現もあった」ことを明らかにした。また、数字を伴う「一杯の涙」や「一滴の涙」、「一零の涙」が代表的な例であり、「一掬の涙」、「一升の涙」や「千行の涙」、「万斛の涙」などの大げさな修辭のもあったことを述べた。実際、近代文学には作品そのものについて「涙を主眼とす」というぐらい、ある面では「涙」を題材としているものも少くない。尾崎紅葉をはじめ、巖谷小波、饗庭篁村、内田魯庵も似たような意見<sup>7)</sup>を出している。このように、近代人が涙に

1) 世良正利(1970)「日本人の表情」『日本人の性格』朝倉書店、p.35に所収(孫引)

2) 上同、孫引

3) 中里理子(2004)「『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて—」上越教育大学研究紀要第24巻第1号、pp.304-316

4) 今回調査した資料は、『明治文学全集』(筑摩書房)・漱石全集(岩波書店)・紅葉全集(岩波書店)・鏡花全集(岩波書店)・逍遙選集(第一書房)・荷風全集(岩波書店)、部分的には『鴉外全集』(岩波書店)・『内田魯庵全集』(ゆまに書房)・『露伴全集』(岩波書店)・『斎藤緑雨全集』(筑摩書房)・『蘆花全集』(新潮社)・『啄木全集』(筑摩書房)・『リプリント日本近代文学』(国文学研究資料館)・『明治翻訳文学全集』(新聞雑誌編)『(大空社)・『新日本古典文学大系 明治編』(岩波書店)・『明治文化全集』(日本評論社)、その他雑多なものである。本稿で取り上げている用例数はあくまでも現在まで調べて得た結果であり、もっと調べれば当然変動はある。しかし、この調査により近代における大まかな傾向は得たと思われる。

5) 羅王洙(2011)「近代における『紅涙』について」『日本近代学研究』30 韓国日本近代学会、pp.5-6

6) 羅王洙(2012)「近代における数字による涙の修辭」『日本近代学研究』37、韓国日本近代学会、pp.29-30

7) 羅王洙(2012)「近代における数字による涙の修辭」『日本近代学研究』37、韓国日本近代学会、pp.8-9

多くの関心を寄せている反面、実際どのような表現をしているのかについてはあまり明らかにされていない。また、大部分が「涙を流す」のような平凡なものであり、「哀涙」のように親切に雰囲気伝える表現は案外多くはないので、多くの資料を参考にして調査するしかない（「涙」を流すことは「泣く」とつながりがあるが、「泣く」ことについては考察の対象としない）。

そこで本稿では、色々の涙の表現のうち、どのような涙を流していたのかを具体的に見てみたいと思う。涙にはどのような種類があるのかを分類し類義用法も把握する一方、使用頻度まで提示することにより、近代の作家における「涙」の表現手法が分かると思われる。ただ、語一つ一つにおける意味そのものの分析までは要らないと思われる。つまり、文脈により意味が異なるようなものではなく、語そのものに固有の意味があるので、ここでは大きな分類として意味別による涙の種類とそれにまつわる細かい表現にはどういうものがあつたのかという修辭的なものを中心にしたいということである。また、この研究により、他の時代と比べる端緒を提供することも可能であると思われる。

## 2. 近代文学における「涙」の表現様相

涙を流す状況は、実に多くあると思われる。しかし、一般的に考えると、「かなしい」時に流すと思われるのは確かであろう。『分類語彙表』<sup>8)</sup>(2版)によれば、「1. 5607」に「液体・分泌物」の項目がある。その中の「08」に「涙」があり、その下位分類に「落涙・感涙・血涙・血の涙・紅涙・熱涙・暗涙・うれし涙・悔し涙・空涙・ありがた涙」が見られる。『分類語彙表』では、「涙」を「自然物および自然現象」の項目に入れてあるのが異色的である。また、『分類語彙表』の第1版(1964年)にはなかった「血の涙・紅涙・ありがた涙」が2版には追加されている。

中村明の用例集である『感情表現辞典』<sup>9)</sup>にも「嬉し涙・暗涙・悲涙・紅涙・涕涙・落涙・悔し涙・血涙・熱涙・感涙」の用例がいくつかずつ取り上げられている。『分類語彙表』や『感情表現辞典』で涙の種類を大別しているのだが、実際の近代文学においても上記の例から大きくは外れていない。しかし、どういう語が好まれているのかという比率の問題や、涙の大別から漏れているものにはどういうものがあるのかという問題が残されている。なお「落涙」

8) 国立国語研究所(2004)『分類語彙表』秀英出版、p.231

9) 中村明(1993)『感情表現辞典』東京堂出版、pp.26-55

は、近代文学にも「落涙」とか「涙を落す」の表現が多数あるが、心情の問題というよりは唯の動作を表わしているのので、ここでは対象から外すことにする。また「紅涙」も、その意味用法について考察したことがあるので外すことにする。

## 2.1 「悲涙・哀涙」

涙を流すときに、どういう涙が一番好まれていたのか。大体は想像できると思うが、その一つとして「悲涙・哀涙」がある。両方とも「かなしみ・かなしさ」を表わす「涙」であるが、どちらがもっと悲しい表現であるのかの判断は難しい。この「悲涙・哀涙」は『分類語彙表』には登録されておらず、『感情表現辞典』には「哀涙」は見られない。では、その実例と類義表現を見てみよう。

死者ヲ抱擁シテ<sup>ホウヤウ</sup>哀涙<sup>アイルイ</sup>ニ咽<sup>ムセ</sup>ビケル。老婢モ亦共ニ<sup>アイルホ</sup>哀涙<sup>サン</sup>ノ潛々タルヲ知ラザリシガ、(『群芳綺話』

大久保勘三朗訳述、明治15年、『明治文化全集』22、p.310)

徒ラニ海面ヲ臨<sup>イタツ</sup>ンテ<sup>カイメン</sup>哀涙<sup>ノゾ</sup>潸然<sup>アイルイサンゼン</sup>タリ(『寄想春史』織田純一郎訳、明治12年、国会図書館蔵本、p.2ノ109)

アリス其動作ノ常ニ非ラサルヲ怪ミマルツラバースノ膝頭ニ伏シ語ナフシ<sup>アヤシ</sup>悲涙<sup>サンサン</sup>潸々トシテ下ル  
(『花柳春話』初編、丹羽純一朗、明治11-13年、『明治初期翻訳選』pp.65-66)

失愛失意の断腸はいかに半世紀を<sup>しつあいしつゐ</sup>悲涙<sup>だんてふ</sup>の中に埋没<sup>まいぼつ</sup>し去りしか。(「阿佛尼」星野其の眼底曾て<sup>き</sup>悲<sup>き</sup>哀の涙を絶たざるに想ひ到らざる也。(「新聞記者の十年間」平田久、明治35年7月、明文全36、p.357)

「悲涙・哀涙」は、文脈から見てかなりの「かなしみ・かなしさ」を表わすものであることがわかる。「悲涙・哀涙」は、涙を流す原因としての代表的なものといえる。ここで「悲涙」を表わす時に、「至恋の悲涙」(「吉田兼好」平田禿木、明治26年1月)、「無量の悲涙」(左同)、「万斛の悲涙」(左同)、「一生の悲涙」(『エマルソン』北村透谷、明治35年10月)、「浮世の悲涙」(『書簡集』樋口一葉、年月不明)、「無限の悲涙」(『平和』田山花袋訳、明治35年10月)、「幾百石の悲涙」(「日本の文学と復讐譚」幸田露伴、大正14年6月)、「半宵の悲涙」(『荒村遺稿』松岡荒村、明治37年7月)などのように修飾される場合もある。つまり、「悲涙」をさらに誇張し

て表現している例もあるということである。総じて「悲涙(24例)・悲涙(3例)・哀涙(6例)・哀涙(1例)」がある。また、「悲哀の涙(6例)のように、両字を交えた漢語の場合もある。似た表現として、訓読み(和語)の場合もある。

とめ おく み ため わか かね かな なみだ のみ え、がほ  
止ずに置のが身の為か分ち兼れば哀しさの涙を飲こみ笑顔をつくり(『春雨文庫』松村春輔、  
明治9年、明文全1、p.350)

ぼ へう まへ あらた かなし なみだ そそ  
墓標の前に新なる悲みの涙を漉ぎぬ。(『三人妻』尾崎紅葉、明治25年、明文全18、p.125)

訓読みの例としては、「哀しさの涙(1例)・哀の涙(1例)・哀しみの涙(1例)・悲しき涙(6例)・悲しい涙(6例)・悲しみの涙(5例)・悲しさの涙(1例)・悲し涙(1例)・悲しむ涙(1例)・悲しむの涙(1例)・その他(2例)」のような種々の形がある。当然であるが、文体の特質により、漢語と和語、または文語的表現と口語的表現を使い分けている。どちらを用いるかは別として、それ自体「かなしい涙」であることは確かである。また、「悲涙」であれ「哀涙」であれ、単独で用いるものもあれば、もう少し具体的なイメージを想定する「涙」もかなりある。

相ヒ見テ相ヒ別ルルハ互ニ哀嘆ノ涙ヲ添フルノミ、(『泰西活劇春窓綺話』服部誠一、明治17年、  
『明治文化全集』22、p.413)

あいたう  
哀悼の涙に乱れて梅吉は尚夢中で居る。(『大さかずき』川上眉山、明治28年、明文全20、p.177)  
エルサレムノタメニ哀憐ノ涙ヲ流シラザロノ墳墓ニ至リテハ友誼ノ涙坐ロニ潛然タリシニ非ズヤ(『真理一斑』植村正久、明治17年10月、明文全46、p.110)

左レバ朋友ノ喪ニ会スレバ哀傷ノ涙ヲ流シ(『真理一斑』植村正久、明治17年10月、明文全46、  
p.111)

多くの士官等は彼の死を聞き哀惜の涙ぐまぬものはなかつた。(『剣と恋』高須梅谿、加島汀月共  
訳、明治45年1月、明文全97、p.279)

わけ  
別ておたかは数年の間親しく事へ奉りし主君なれば、悲歎の涙せきあへず、(『自由艶舌女文章』小室案外、明治17年9月、明治文化全集21、p.72)

袖を絞り歯を喰ひ縛て須臾は悲痛の涙に咽んだがこの時渠の策は成りぬ、(『政界の寧馨児』鶴崎  
鷺城、明治43年9月、明文全92、p.357)

少王は悲憤の涙止得ず、(『暴夜物語』永峰秀樹、明治8年2月、明治文化全集21、p.388)

衆此一語ヲ聴イテ覺ヘズ悲憤慷慨ノ涙ヲ注ゲリ。(『泰西活劇春窓綺話』服部誠一、明治17年、

『明治文化全集』22、p.518)

今更に悲喜の涙止まらず、(『春の夜語り』幸田露伴、大正5年5月、露伴全集6、p.35)

「悲・哀」を生かしながら、もっと具体的な属性を浮かび上がらせた例である。その例としては「哀嘆の涙(1例)・哀悼の涙(1例)・哀憐の涙(2例)・哀傷の涙(1例)・哀惜の涙(1例)・哀情の涙(1例)・哀痛の涙(2例)・悲嘆の涙(悲歎)(17例)・悲痛の涙(1例)・悲恨の涙(1例)・悲哉の涙(1例)・悲憤の涙(15例)・斷腸悲歎の涙(1例)・悲恋の涙(2例)・悲恋悩殺の涙(1例)・悲憤慷慨の涙(1例)・大悲の涙(1例)・大悲観の涙(1例)・悲痛の涙(4例)・悲慨の涙(1例)・悲傷の涙(2例)・悲慘の涙(1例)・悲喜の涙(1例)」などがある。「悲嘆の涙」と「悲憤の涙」が一般的に用いられており、その他少数ではあるが、「悲涙・哀涙」と関連した表現がかなり用いられていることが伺われる。また「悲涙」の場合にはは、「喜涙」と一緒に用いられた「悲喜の涙」のような独特なものもある。このように、『分類語彙表』でも注目されなかった「悲・哀」系統の涙の種類は実に多様であることが分かった。

## 2.2 「喜涙・嬉涙・感涙」

普通、常識的にいえば「涙」を流すということは、2・1で見たように「悲・哀」を思い起すのだが、これとは正反対に「よろこぶ・うれしい」時にも涙を流す場合がある。さらに「ありがたい・感謝」の時にも涙をながす場合がある。『分類語彙表』や『感情表現辞典』には「うれし涙・感涙」はあるが、「喜涙・喜び涙」は登録されていない。元来「喜涙・嬉涙」と「感涙」は少々性格が異なるのだが、ここでは一緒に扱うことにする。

と喜涙を翻さぬばかりに禮を云ふにぞ、(『鉄仮面』黒岩涙香、明治25年12月、明文全47、p.93)

お文は心の内に手を合せ、胸に嬉涙を湧かせて喜びぬ。(「みをつくし」馬場孤蝶、明治27年9月、明文全32、p.332)

英雄ノ鐵腸モ亦將ニ断ヘントシ、歡涙潜々トシテ流レ、(『泰西活劇春窓綺話』服部誠一、明治17年、『明治文化全集』22、p.455)

浮木丸は歡涙の流るるを覺えず、(『浮木丸』尾崎紅葉、明治26年1月、紅葉全集5、p.234)

まず、「喜涙(1例)・嬉涙(6例)」の場合、無訓であるのでどう読んだのかは未知である。「喜涙・嬉涙」は『日本国語大辞典』(第2版、以下『日国大』)に音読みとして登録されていない。その代りに「よろこび涙・嬉し涙」のように訓読み(和語)の見出しはある。それで、基本的に「喜涙・嬉涙」は音読みされていないと思われる。一方、類義語として「歡涙」がある。尾崎紅葉は『浮木丸』で「歡涙」(1例)のように音読みしているが、「歡涙が」(『恋のぬけがら』明治23年7月)・「歡涙に暮れながら」(『二人むく助』明治24年3月)・「歡涙に暮れければ」(『浮木丸』明治26年1月)には「うれしなみだ」の訓を付けている。『泰西活劇春窓綺話』の用例は漢文直訳体であるので音読みの可能性がある。「歡涙」の音読みは『日国大』にも登録されていない例である。

喜び涙嬉し泣<sup>にはか いでき</sup>俄に出来し此池の水も黄金<sup>こがね</sup>の色なして(『掘出し物』饗庭篁村、明治22年5月、明文全26、p.103)

痒<sup>かゆ</sup>き処に手の届く其の執成<sup>とりなし</sup>に老母は唯だ歡<sup>くわんるゐ</sup>び涙を浮べるのみ。(『縁蓑談』須藤南翠、明治21年、明文全5、p.353)

「サラー」も其<sup>そこ</sup>処に<sup>まろ</sup>転び出<sup>いで</sup>て嬉<sup>うれ</sup>し涙<sup>なみだ</sup>に暮<sup>くれ</sup>にける(『白露革命外伝自由廻征矢』井上勤、明治17年9月、明治初期翻譯文學選、p.122)

祖母が目を細くして<sup>うれしなみだ</sup>嬉涙を<sup>こぼ</sup>溢しさうな、弟<sup>おとと</sup>が嬉しがつて飛はねさうな、(『野末の菊』嵯峨の野おむろ、明治22年、明文全17、p.239)

私は不測に<sup>そぞろ</sup>嬉涙<sup>うれしなみだ</sup>の流るるを禁じ得なかつた。(『海底軍艦』押川春浪、明治33年11月、明文全95、p.346)

そして女はそのきれいな明かな眼に、やすらかなきよい、たのしい涙を流し、あつい日中<sup>につちう</sup>に

天一<sup>てんいつぱい</sup>杯になる<sup>ほうせき</sup>宝石のやうに輝<sup>あかり</sup>き、(『女主人』山田枯柳訳、明治39年2月、明治翻譯文学全集45、p.225)

純粹の和語としては、「歡<sup>うれしなみだ</sup>び涙(1例)・嬉<sup>うれしなみだ</sup>し涙(56例)・嬉<sup>うれしなみだ</sup>涙(6例)・うれし涙(1)・嬉しい涙(1)・嬉<sup>うれしなみだ</sup>涙(1例)・喜<sup>うれしなみだ</sup>ぶ涙(1例)・よろこびの涙(2例)・喜びの涙(1例)・喜び涙(2例)・喜の涙(3例)・たのしい涙(1例)・その他(2例)」がある。「嬉し涙」が一般的に用いられていてかなり偏差が見られる

が、一般的な使い方とは思われない「たのしい涙」までであることが異色である。さらに「喜涙・嬉涙」には、「悲涙・哀涙」のように、その様子を付け加える表現も多数ある。

千古末航ノ大洋ニ突出シ。驚喜ノ涙ヲ濺キ。(『将来之日本』徳富蘇峰、明治19年10月、明文全34、p.70)

これら <sup>しよさく</sup>たい <sup>た</sup>誰れか <sup>ずいき</sup> <sup>なみだ</sup> <sup>を</sup> <sup>もの</sup> <sup>べ</sup> 随喜の涙を零さざる者のある可き。(「後の月影」北村透谷、明治25年4月、明文全29、p.176)

上のような例には、「驚喜の涙(1例)・随喜の涙(14)・随喜渴仰の涙(1例)・<sup>よろこび</sup>喜悅の涙(1例)・喜悅の涙(1例)・歓喜の涙(2例)」がある。漢語としての「随喜の涙」<sup>10)</sup>、つまり「喜びのあまりこぼす涙」が多用されている。このように、喜ぶときも嬉しいときも涙をながす表現が近代には発達していた。次に、類似表現として「感涙」について見てみよう。文字通り、「感謝して・ありがたくて」または「感動して」流す涙である。

此時早苗ハ菊雄ガ言フ一聞スルヤ感涙数行只泣伏シテ言無カリシガ(『世路日記』菊亭香水、明治17年、明文全2、p.376)

私の過去<sup>くわ こ</sup>の罪<sup>せんれい</sup>の洗礼<sup>かんしや</sup>の如く、感謝<sup>ふたしづく</sup>の涙二滴はらはらと額<sup>ひたい</sup>に御そそぎ被下候。(『椿姫』長田秋濤、明治36年、明文全7、p.363)

奈何<sup>い かん</sup>とも詮<sup>せん</sup>方<sup>かた</sup>なき感慨<sup>い</sup>の涙<sup>いつ</sup>にくれしが、其れよりは何時<sup>い</sup>となく秘密<sup>せクレツトソサイチ</sup>会社<sup>かい</sup>なるもの〜(『鬼歌歌』宮崎夢柳、明治17年、明文全5、p.72)

「感動<sup>かんどう</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」とか書いてある那樣本<sup>そんぽん</sup>を唯一冊<sup>もち</sup>貰<sup>もら</sup>つた限<sup>きり</sup>。(『胸算用』尾崎紅葉、明治36年10月、紅葉全集別巻、p.506)

腹の底には手を合せて拝まぬばかりに感じ入りて感佩<sup>ありがた</sup>涙<sup>とど</sup>遏<sup>とど</sup>めあへず、(『風流微塵蔵』「あがりがま」幸田露伴、明治27年10月、露伴全集8、p.339)

某夫人<sup>ぼうふじん</sup>、かの時その女兒<sup>がんきよう</sup>の眼眶<sup>かんおん</sup>に感恩<sup>おん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>浮かべるを見しとて、(『西国立志編』中村正直、明治4年7月、講談社学術文庫、p.514)

有難<sup>ありがた</sup>涙<sup>なみだ</sup>を装<sup>よそほ</sup>ひつつ再び獸王<sup>ふた</sup>に打向<sup>じうわう</sup>ひ〜(『禽獸世界狐の裁判』井上勤、明治17年3月、『明治初

10) インターネットの検索によると、現代でも「随喜の涙」の表現は多用されている。



期翻訳選』p.309)

その親心を汲分けては難有<sup>ありがたみだ</sup>涙に暮れさうなもののトサ文三自分にも思ツたが如何したものか感<sup>どう</sup>涙も流れず唯何となくお勢の帰りが待遠しい(『浮雲』二葉亭四迷、明治20年、明文全17、p.39)

日本では古くから「感涙」を用いていて、歴史が長くその使用量も多い。「感涙(58例)」は、文字通り「感謝の気持」または「何かの行動に対して感じたこと」を込めた涙であるが、これとまつわる種々の表現がある。その例を見ると「感謝の涙(23例)・感慨の涙(5例)・感動の涙(2例)・感情の涙(1例)・感泣の涙(2例)・感喜の涙(1例)・感激の涙(2例)・感恩の涙(1例)・感佩<sup>ありがた</sup>涙(1例)」のように、「感」とまつわる涙が総動員されているかのように非常に細かくその心情を描写していることがわかる。これは、類義の「喜涙・嬉涙」もそうであったが、特に「悲涙・哀涙」においても多様な例が見られたのと同じである。また「何かに対してありがたい気持」を込めたものには、「有難涙(9例)・難有涙(1例)・難有泪(1例)・有り難涙(1例)・有りがた涙(2例)・有がた涙(2例)・ありがた涙(1例)」のように、使用例はさほど多くないものの、表記の面で多様性が見られる。このように、「喜ぶ・嬉しい・しみじみ感じる」ときも、涙を流す表現が多様であることがわかった。

## 2.3 「怨涙・口惜涙・後悔の涙」

涙を流すことには、実に様々な状況があることに気が付く。その中には人を怨んだり憎く思ったり、または残念に思ったりして流す涙もあるが、『分類語彙表』や『感情表現辞典』では「悔し涙」以外は取り上げられていない。ここでは、「後悔の涙」は性格が少々異なるけれどもこの部類に入れた。まず、「うらみ」系統を見てみよう。

恨みの涙、目にくもり泣<sup>な</sup>いて蒔きたる土くれに(『小塚空谷編』、明治36年7月、明文全83、p.356)

肩呼吸<sup>かた い き</sup>をしてゐる小稲<sup>こいね</sup>の目には、恨<sup>くやしなみだ</sup>涙が溢<sup>あふ</sup>れて居た。(『仇浪』尾崎紅葉、明治31年2月、紅葉全集別巻、p.301)

怨<sup>うらみ</sup>涙に襲<sup>むせび</sup>つづ暫時<sup>しばし</sup>詞<sup>ことば</sup>は出ざりけり(『昼夜帯加茂川染』高島藍泉、明治16年7月、『リプリント日本近代文学』p.42)

忽<sup>たちま</sup>チニシテ怨<sup>えん</sup>涙<sup>るい</sup>潜<sup>さん</sup>々言<sup>い</sup>テ曰<sup>いふ</sup>ク(『世路日記』菊亭香水、明治17年、『新日本古典文学大系明治編30』

p.131)2例

一人<sup>ひと</sup>漣<sup>りきざなみ</sup>波<sup>なみ</sup>が遺恨<sup>ゐこん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>せきあへず(『小夜千鳥浪の音信』三品蘭谿、明治16年6月、『リプリント日本近代文学』p.88)

眼<sup>まなこ</sup>は痛恨<sup>つうこん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>を湧<sup>わか</sup>して、彼<sup>かれ</sup>は覺<sup>おぼ</sup>えず父<sup>ちち</sup>の面<sup>おもて</sup>を睨<sup>にら</sup>みたり。(『金色夜叉』尾崎紅葉、明治30年、明文全18、p.211)

侮辱<sup>ぶちよく</sup>を受けるは遺憾<sup>くやし</sup>の涙<sup>なみだ</sup>に堪<sup>かた</sup>へねども(『文明花園春告鳥』前編、服部誠一、明治21年1月、『リプリント日本近代文学』96、p.38)

空<sup>むな</sup>しく遺憾<sup>ゐかん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>を呑<sup>の</sup>み自<sup>みづ</sup>から怒<sup>いか</sup>りを制<sup>せい</sup>するの苦<sup>くる</sup>しさは(『文明花園春告鳥』前編、服部誠一、明治21年1月、『リプリント日本近代文学』96、p.41)

眼<sup>め</sup>眸<sup>め</sup>は千恨<sup>せんこん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>を含<sup>含む</sup>が如<sup>ごと</sup>く、口舌<sup>くわく</sup>は萬緒<sup>ばんしよ</sup>の怨<sup>うら</sup>を訴<sup>う</sup>ふるに似<sup>に</sup>たり。(『東京新繁昌記』、服部誠一、明治7年4月、明文全4、p.195)

母<sup>はは</sup>親<sup>おや</sup>は無念<sup>むねん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>の留<sup>とど</sup>め<sup>め</sup>方<sup>かた</sup>もなく、(『晩桜』『薄氷遺稿』北田薄氷、明治30年10月、『リプリント日本近代文学』p.439)

情<sup>じやう</sup>夫<sup>ふ</sup>ハ却<sup>かへ</sup>テアンナヲ破<sup>やぶ</sup>節<sup>せつ</sup>ト思<sup>おも</sup>ヒ憤<sup>ふん</sup>怨<sup>えん</sup>ノ涙<sup>なみだ</sup>ヲ吞<sup>の</sup>ンテ泣<sup>なみ</sup>キ沈<sup>しん</sup>ムトハ神<sup>かみ</sup>ナラス(『虚無党退治奇談』川島忠之助、明治15年、『明治初期翻訳文学選』p.146)

人を憎悪するような涙にも種々の様相が見られる。漢字表記としては「恨・怨」があり、各々訓読みをしているものがある。「恨涙・怨涙」の表記もあるが、両方とも「うらみなみだ」であり、尾崎紅葉が「恨涙」を「くやしなみだ」と読むことが特異である。このような類には、「恨みの涙(2例)・恨<sup>うらみ</sup>の涙(1例)・恨<sup>くやしなみだ</sup>涙(1例)・怨<sup>うらみ</sup>の涙(2例)・怨<sup>うらみなみだ</sup>みの涙(1例)・怨<sup>えんるい</sup>涙(1例)・怨<sup>えんるい</sup>涙(2例)」がある。『日国大』には「恨涙・怨涙」が漢語として登録されていない。しかし、『世路日記』には「怨<sup>えんるい</sup>涙」(1例は無訓)という読みがある。つまり、漢語として読んでいた訳であるが、辞書の見出し語としては見られない。これと似たような表現として、「遺恨<sup>うらみ</sup>の涙(1例)・遺恨<sup>うらみ</sup>の泪(1例)・遺恨<sup>うらみ</sup>の涙(2例)・遺憾<sup>くやし</sup>の涙(1例)・遺憾<sup>ゐかん</sup>の涙(1例)・怨恨<sup>うらみ</sup>の涙(1例)・痛恨<sup>うらみ</sup>の涙(1例)・千恨<sup>せんこん</sup>の涙(1例)・無念<sup>むねん</sup>の涙(43例)・憤怨<sup>ふんえん</sup>の涙(1例)・悔恨<sup>くわいこん</sup>の涙(3例)・残念<sup>ぜんねん</sup>の涙(1例)」がある。この中で、一番基本的に用いられるのが「無念の涙」である。「無念」も「口惜しく思う」ことであるが、類義表現の中で近代にはこれが最も一般化していたといえよう。「うらみ」関係の涙は、多岐にわたって用いられており、用例数から見て多くはなかったが多様な様子が見ら

れた。次は、「くやしい・後悔する」ときの涙である。なお上で「遺憾」に対して「くやし」という訓を当てたが、これは「うらみ」の類に入れた。

証拠があれば云解く術もなく、口惜涙を流し、(『怪談牡丹灯籠』三遊亭円朝、明治17年、明文全10、p.36)

あはれ小民は口惜涙袖につつみて、(『自由艶舌女文章』小室案外、明治17年9月、明治文化全集21、p.56)

と守雄の腕を揺ぶ<sup>くや</sup>りて悔し涙を止め得ず。(『鉄仮面』黒岩涙香、明治25年12月、明文全47、p.33)

机の前にブツ座ツて歯を嚙切ツての悔涙ハラハラと膝へ溢した。(『浮雲』二葉亭四迷、明治20年明文全17、p.23)

大悦或は子供心の悔みの涙にて注がれし(『女主人』山田枯柳訳、明治39年2月、明治翻訳文学全集45、p.177)

宮内は尚も三太を慰撫<sup>なぐさ</sup>り身の過失を後悔の涙に咽<sup>むせ</sup>ぶ(『巷説二葉松』宇田川文海、明治17年1月、明文全2、p.265)

～泣咽<sup>なみ</sup>ひ禁めかねたる懺悔の涙座敷<sup>しめ</sup>湿りても静かに身を～(『善悪押絵羽子板』斎藤緑雨、明治19年1月、斎藤緑雨全集5、p.27)

口に普門品を誦<sup>ふ</sup>へて心に夜叉<sup>もんぼん</sup>を養<sup>とな</sup>ふ女に後悔<sup>やし</sup>随喜<sup>しや</sup>の涙<sup>ひと</sup>を滾<sup>こぼ</sup>し、いかに惚<sup>よわ</sup>れた弱身<sup>み</sup>とはいひながら、(『奴の小刀』村上浪六、明治25年6月、明文全89、p.7)

「くやし涙」は「くやしさのあまり出る涙」であるが、表記の上で多様さを見せている。それには「くやし涙(1例)・くやしき涙(1例)・口惜涙(36例)・口惜し涙(19例)・口悔し涙・口惜し涙(2例)・口惜しき涙(1例)・口惜しい涙(1例)・口惜涙(1例)・口惜き涙(1例)・口惜しい涙(3例)・悔し涙(5例)・悔涙(2例)」がみられる。このうち「口惜涙・口惜し涙」が大勢を占めている。ちなみに、「後に悔いて流す涙」である「後悔の涙」も多用されている。上に提示したように、「悔みの涙(1例)・悔悟の涙(2例)・後悔の涙(12例)・後悔随喜の涙(1例)・懺悔の涙(6例)・懺悔涙(1例)」の例が見られ、「後悔の涙」も比較的に多用されていたことがわかった。

## 2.4 「愛の涙・同情の涙・懐旧の涙」

ここでは、「愛」関係の語と、それにまつわる「同情心」、そして昔を懐かしむような涙を一纏めにして見ることにする。上に提示したような語と涙とはやや縁遠いようにも思われるが、「愛」や「思いやり」、「昔のことを懐かしく思う」状況でも涙がでる様子を描写している。以下、どのような形で用いられていたのかを見てみよう。

手づから屍体を埋め、愛の涙に水<sup>そそ</sup>濺ぎ、更に己れ心を此墓の中に埋めてくれたではないか。

(『椿姫』長田秋濤、明治36年、明文全7、p.278)

背丈の高い、品格の<sup>ひん</sup>好<sup>い</sup>い、親切<sup>しんせつ</sup>げな人で、情愛の涙を以て寿太郎氏<sup>むか</sup>を迎へ(『椿姫』長田秋濤、

明治36年、明文全7、p.370)

どんなに優さしい熱愛の涙が籠<sup>かご</sup>つて居つたらう。。(『若葉』石橋忍月、明治26年1月、明文全23、p.315)

怒<sup>いかり</sup>の眼は鋭<sup>まなこ</sup>けれども恩愛の涙<sup>おんあい</sup>は忍<sup>しの</sup>ばれず、(『滝口入道』高山樗牛、明治27年4月、新日本古典文学大系明治編30、p.338)

仕業で天下の目を迷わす、不動は威怒<sup>ゐぬ</sup>の相を示して内心は慈愛の涙<sup>なみだぐ</sup>含<sup>く</sup>む、(『平清盛』山田美妙、明治43年12月、明文全23、p.162)

尚ほ其眼<sup>な</sup>の<sup>その</sup>うち<sup>め</sup>には慈悲の涙<sup>じひ</sup>輝<sup>なみだかが</sup>やくやさしさに比<sup>くら</sup>ぶれば、<sup>じつ</sup>実<sup>てんち</sup>に<sup>さう</sup>天地<sup>あ</sup>の相違であつたのである。(『巨人山』佐藤迷羊訳、明治33年8月、明治翻訳文学全集18、p.239)

崩ズルニ当リテハ情涙ヲ催スモノ其幾人ナルヲ知ラズト云フ。(『佳人之奇遇』東海散士、明治24年、明文全6、p.79)

又其薄命と無残の最後に同情の涙<sup>そそ</sup>を<sup>なみだ</sup>濺<sup>そそ</sup>がぬ者<sup>もの</sup>はあるまい。(『倫敦塔』夏目漱石、明治41年1月、漱石全集2、p.23)

誦せむ人の早く悲愁同情の涙を<sup>そそ</sup>そ<sup>ぎ</sup>し故ならむか。(「神曲餘韻」平田禿木、明治30年5月、明文全32、p.264)

立掛ツてはいよいよますます滝を落す無情の涙、それが滴ツて二郎の顔を僕たぬやうにと(『胡蝶』山田美妙、明治22年1月、明文全23、p.18)

ドコにか真情の涙<sup>そそ</sup>を<sup>なみだ</sup>灑<sup>そそ</sup>いで居る美人が有ると云ふ、(『当世人物評』石川半山、明治34年5月、明文全92、p.298)

「愛の涙(4例)」はあるが、「愛涙」のような漢語としての例は見あたらず『日国大』にもない。「愛」と関係する類義のものには、「情愛の涙(1例)・熱愛の涙(1例)・愛情の涙(2例)・恩愛の涙(10例)・慈愛の涙(2例)・慈悲の涙(3例)・惻隠慈悲の涙(1例)・情涙(1例)・無情の涙(1例)・情実の涙(1例)・同情の涙(31例)・悲愁同情の涙(1例)・真情の涙(1例)」など多種にわたっているのだが、用例としては多くないことがわかる。比較的に「恩愛の涙」や「同情の涙」が多用されている。また、「同情の涙」の類似表現として、「憐の涙」がある。

彼等の憐れむべき落涙を見、彼等の不幸なる身の上話を聞くに付けて、(『聯島大王』古宮山天香、明治20年、明文全6、p.388)

スキュデリイは目に憐の涙を含んで、此少女を見て居るとき、(『玉を懷いて罪あり』森鷗外、明治22年3月、鷗外全集1、p.116)

其の毛を浴はつて可憫の雫がぱたりぱたりと堕ちてゐる。(『俠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p.165)

嗚呼詩人の胸間には鬼神の手も挫しぐ可からざる可憐の涙珠ありとや謂はん。(『詩伯ゴールドスミツス』戸川残花著、明治26年4月、明治翻訳文学全集21、p.192)

量的には一例ずつのみで、他に「憐愍の涙(徳富蘆花)・慈悲憐憫の涙(姉崎嘲風)・不愍の涙(太田玉茗)」もあり、非常に少いとはいえ、「憐れ」関係の涙も多種に渡っている。用例としては極僅かであるので一般的に流す涙ではないように思われるが、涙を流す時の感情は細かく表現をしていたことが分かる。

次に、昔を思い出す「懐旧の涙」類にはどのようなものがあるのかを確かめてみよう。

とどめかねたる懐かし涙、思はず〜(『土偶木偶』幸田露伴、明治38年9月、露伴全集4、p.160)

懐かしの涙垂しつつ、(『男ごころ』尾崎紅葉、明治26年3月、紅葉全集4、p.177)

懐舊の涙に哽び又大忠の手代〜(『蝶島紫山袈裟模様』高島藍泉、明治13年9月、明文全2、p.210)

話す話す情迫つて、追懐の涙止めやらぬ。(『二郎經高』山田美妙、明治41年10月、明文全23、p.89)

鬼を欺くばかりの勇士も述懐の涙を両眼に泛べ遺恨の拳を握詰め、(『支那問罪義経仁義主汗』福地桜痴、明治27年、明文全11、p.130)

3 案外、昔を思い出す涙の種類が多い。和語としては「懐かし涙(1例)・懐かしの涙(1例)・可<sup>なつかし</sup>懐<sup>なつかし</sup>さの涙(1例)」がある。反面、漢語の例としては、「懐旧の涙(17例)・述懐の涙(1例)・追懐の涙(3例)・追想の涙(1例)・追慕の涙(3例)・追憶の涙(1例)・回想の涙(1例)・懐古の涙(1例)」がある。この中で「懐旧の涙」が最も一般的に用いられていることがわかる。

## 2.5 「熱い涙・血の涙」

「熱い涙」と「血の涙」とは深い関係はないが、両者ともに激しい涙であることは確かである。中村明は「血の涙」を「哀」の部類に、「熱涙」を「昂」の部類に入れていてもともと性格が異なっている。近代の日本文学においては、涙の代表的な表現というべきものではないかと思われる。まず「熱い涙」を見てみよう。

熱い涙が自<sup>おの</sup>づと湧<sup>わ</sup>いて、枕紙を濡らすのである、(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p.62)

彼は熱<sup>あつ</sup>き涙<sup>なみだ</sup>を握<sup>にぎ</sup>りて祈<sup>いの</sup>るが如<sup>ごと</sup>く嘆<sup>かな</sup>ちぬ。(『金色夜叉』尾崎紅葉、明治30年、明文全18、p.200)2例

不意にオルデノーフは、熱<sup>あつ</sup>した涙<sup>なみだ</sup>が霰<sup>あられ</sup>のやうに女<sup>をんな</sup>の眼<sup>め</sup>から流<sup>なが</sup>れて、(『女主人』山田枯柳訳、明治39年2月、明治翻訳文学全集45、p.195)

我が膝は暑<sup>あつ</sup>き涙<sup>なみだ</sup>に全<sup>まづ</sup>く濡<sup>ぬ</sup>れて仕まつた。(『泥水清水』江見水蔭、明治29年、明文全22、p.56)

私が之程思つてるのと思ふと、熱<sup>あつ</sup>か<sup>あつ</sup>い涙<sup>なみだ</sup>が又しても枕を濡らした。(『天鷲絨』石川啄木、明治41年6月、啄木全集3巻、p.138)

冷<sup>ひや</sup>い涙<sup>なみだ</sup>は彼の蒼<sup>あは</sup>ざめた頬<sup>ほ</sup>を傳<sup>つた</sup>つて流<sup>なが</sup>れ落<sup>お</sup>ちた(『春』島崎藤村、明治41年4月、明文全69、p.155)

和語で表わされる「熱い涙」類にも多様な表現が見られる。「熱い涙」の場合は、「悲涙・悔し涙・愛の涙」のように、語そのものに具体的な涙の特性が表われてはいない。つまり全体の文脈のなかでどういう状況で涙を流しているのかを把握するしかない。「熱い涙」は中立的な性格で、感情が込み上げられて流す激しく熱い涙であることは確かである。「あつい」は温度性を持っていて、唯の涙よりも温度の高い方がその時の状況を強調して分かりやすく伝達できるというレトリックであるといえる。同じく例は少いが「温かい涙」は「穏和な雰囲気」、「冷たい涙」は「冷静な雰囲気」を醸し出していることが窺われる。このように、温度

性を持つ涙によってもその場の特性があらわになっている。和語の用例数は「熱い涙(59例)・熱き涙(48例)・暑き涙(1例)・熱き泪(1例)・温かき涙(1例)・温かい涙(1例)・熱かみ(1例)・冷たい涙(5例)」のようであり、かなり多用されていることが分かる。では、漢語としての「熱涙」はどうだろうか。

たい せう おく ねつるゐ ひそ あ  
大笑の奥には熱涙が潜んで居る。(『趣味の遺伝』夏目漱石、明治39年、岩波書店、p.210)

いだ し みや かほ はふ お ねつたう なみだ ひた そ つめ くち ぐち すす  
抱き緊めたる宮が顔をば紛り下つる熱湯の涙に浸して、其の冷たき唇を喰ひ吮ひぬ。(『金色夜叉』尾崎紅葉、明治30年、明文全18、p.289)

こ が まん  
太兵衛めが隠言吐くに辛抱出来ず熱鉄の涙に呉れしを、(『文学一斑』内田魯庵、明治25年3月、内田魯庵全集2、p.156)

世に對し已に對する無念の熱涙は泉の如く湧き、(『青蘆集』徳富蘆花、明治35年、蘆花全集3、p.419)

まつくる たたず  
漆の如く真黒なる闇に佇みて偽り無き熱誠の涙ほろほろと、黙して〜(『風流微塵蔵』「あがりがま」幸田露伴、明治27年10月、露伴全集8、p.331)

基本的には、漢語の「熱涙(67例)」も多用されている。「熱涙」だけの表現であっても「非常に感動して思わず流す涙」(『日国大』)であることが分かるのだが、さらに強調した「熱湯の涙(3例)・熱鉄の涙(2例)」も用いられている。さらに「熱涙」を修飾した、「慷慨ノ熱涙(1例)・悲憤の熱涙(1例)・同情の熱涙(1例)・嫉妬の熱涙(1例)・感激の熱涙(1例)・無念の熱涙(1例)・赤誠の熱涙(1例)・熱誠の涙(1例)・満腔の熱涙(1例)」のように、実に多様な形の表現が見られる、また、用例としては提示していないけれども、数量を表わす「一滴の熱涙(2例)・千行の熱涙(2例)・幾百石の熱涙(1例)・萬斛の熱涙(4例)」のように、大げさなレトリックとして活用していることも確認できた。この熱涙という漢語は、『日国大』によれば明治16年の『傾国美談』に初出例が見られることから、明治期になってから人気を得たように思われる。次は、「血の涙」を見てみよう。

ち あせ しぼ ち なみだ なが  
血の汗を絞り、血の涙を流し、(『梓神子』坪内逍遙、明治24年5月、逍遙撰集8、p.156)

おく ちまなこ なんだ  
父を討たせ子に後れ、血眼の涙を拭ふ武者、(『山崎合戦』塚原洪柿園、明治37年5月、明文全89、p.111)

然<sup>シカ</sup>リ而<sup>シカ</sup>シテ語<sup>コトイマ</sup>未<sup>ナカ</sup>ダ半<sup>ケツル</sup>バナラズ血<sup>ケツル</sup>涙<sup>イサンゼン</sup>漣<sup>クダ</sup>然<sup>クダ</sup>トシテ下<sup>クダ</sup>ル(『寄想春史』織田純一郎訳、明治12年、国会図書館蔵本、p.130)

紅<sup>コウガン</sup>顔<sup>ガン</sup>忽<sup>サウシヨク</sup>チ蒼<sup>ヘン</sup>色<sup>ナカ</sup>ト変<sup>ケツル</sup>ジ双<sup>フク</sup>眼<sup>コ</sup>血<sup>キフ</sup>涙<sup>セツ</sup>ヲ含<sup>セツ</sup>ンデ呼吸<sup>セツ</sup>漸<sup>セツ</sup>々<sup>セツ</sup>切<sup>セツ</sup>ナリ(『花柳春話』四編、丹羽純一郎、明治11-13年、『明治初期翻訳選』p.68)

宗五郎ハ中<sup>ココロノナカ</sup>傷<sup>ケツル</sup>裂<sup>ケツル</sup>クルガ如<sup>ケツル</sup>ク血<sup>ケツル</sup>涙<sup>イサンゼン</sup>双<sup>フク</sup>眼<sup>コ</sup>二<sup>ニ</sup>溢<sup>アフ</sup>ルルモ、(『情海波瀾』戸田欣堂、明治13年、明文全5、p.6)

「血の涙(37例)」は激しく泣き悲しむような涙で、古くから用いられてきた。「血の涙」は単独で用いられる場合が多く、「熱き血の涙」(「みをつくし」馬場孤蝶、明治27年9月)・「愁い<sup>つらい</sup>悲<sup>かな</sup>しい血<sup>ち</sup>の涙<sup>なみだ</sup>を流<sup>なが</sup>して(「二階の客」『薄氷遺稿』北田薄氷、明治31年8月)のように「血の涙」が修飾される例は少かった。このような、二重以上の重複の涙については3で総括して述べることにしたい。「血眼<sup>ちまなこ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」のような特殊な例は殆んど見あたらなかった。

『日国大』によれば、漢語としての「血涙(33例)」には『日葡辞書』の例があるが、明治期になって流行した言葉だと考えたためか近世の例はなく、徳富蘆花の『思い出の記』(明治33年)の例を文学作品の初出の例としている。しかし、『花柳春話』(明治11年)を始め、明治10年代には色々の作品に出現している。このことから見ると、「血涙」は明治期になってからの一つの流行語であったといえよう。

## 2.6 「その他」

今まで述べてきた例の外にも特別な涙は多数ある。ここでは類型別には分けられないので、残りの例を一括して述べていきたい。以下「怒りの涙・別れの涙・愁涙・空涙・暗涙」について見ることにする。まず、「怒りの涙」である。

覚<sup>おぼ</sup>えず怒<sup>いか</sup>りの涙<sup>なみだ</sup>を振<sup>ふる</sup>ひしかば〜(『文明花園春告鳥』前編、服部誠一、明治21年1月、『リブリント日本近代文学』p.264)

眼<sup>い</sup>には<sup>かり</sup>忿<sup>なみだ</sup>怒<sup>なみだ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>、胸<sup>ふくしゅう</sup>に復<sup>ほむ</sup>讐<sup>む</sup>の炎<sup>ほむ</sup>、我<sup>われ</sup>は内<sup>うち</sup>外<sup>そと</sup>水<sup>みづ</sup>火<sup>か</sup>に攻<sup>こう</sup>められつづ室<sup>むろ</sup>へ帰<sup>かえ</sup>つて来<sup>き</sup>た。(『椿姫』長田秋濤、明治36年、明文全7、p.355)



鉄血ノ暴政ニ屈服シテ空ク憤涙ヲ吞ムモノ百餘歳ニ及ベリ。(『佳人之奇遇』東海散士、明治24年、明文全6、p.81)1例

憤涙を吞むた與次兵衛は、(『俠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p.151)

わが眼よりは憤りの涙落ち、(「唯暗を見る」国木田独步、明治29年夏、明文全66、p.276)

おお五郎かとばかり慷慨の涙に御声も定かならず、(『弓矢神』齋藤緑雨、明治27年2月、明文全28、p.119)

慷慨鬱勃の涙を揮ふ者に非して、箇人若しくは社会に対する至誠の涙なりと雖も、詩人が情界の涙に沈みて〜(『詩伯ゴールドスミツス』戸川残花著、明治26年4月、明治翻訳文学全集21、p.189)

義経は御遺骸を打守りて御嘆の涙に直垂の露を湿して〜(『支那問罪義経仁義主汗』福地桜痴、明治27年、明文全11、p.148)1例

「怒りの涙(2例)・忿怒の涙(1例)・腹立涙(1例)」は、それ自体あまり流すことのない涙のように思われる。「怒涙」という表記も見られない。一方、類似表現である「憤涙(6例)・慷慨の涙(7例)」が見られる。他に、「憤りの涙(1例)・憤涙(2例)・慷慨鬱勃の涙(1例)・嘆の涙(1例)」のような類似表現が多様に見られる。「悲涙」のところに「悲憤慷慨の涙」などがあったが、ここでは除いた。

では、人と別れるときには、どのような涙を流すだろうか。

四の袂に絞りもあへぬ別の涙の、空に通ひてや、(『嶺雲揺曳』田岡嶺雲、明治32年3月、明文全83、p.46)

相共二分袂ノ情ニ堪ヘズ坐ロニ別涙ニ咽ノバントス(『花柳春話』附録、丹羽純一郎、明治11-13年、『明治初期翻訳選』p.4)2例

必らず心配たまふなと口には云ど心には離別の涙堰あへず(『禽獸世界狐の裁判』井上勤、明治17年、『明治初期翻訳選』p.84)

別離の悲しき涙の中には、此悲しさ苦しさもいつか(『泥水清水』江見水蔭、明治29年、明文全22、p.63)

将ニ哀別ノ涙雨滴ニ等シカラントス(『真理一斑』植村正久、明治17年10月、明文全46、p.98)

別れる時の涙は、「別れの涙(5例)」「別涙(4例)」が代表的な涙であると思われる。文字通り「別れを惜しんで流す涙」(『日国大』)であるが、漢語としての「別涙」は平安時代から用いられていて歴史は長い。その一方で、文学作品にはあまり現われていない。しかし、「別れ」と関連した例の種類はやはり多様である。その中には、「離別の涙(2例)・離別の涙(1例)・哀別の涙(3例)・別離の涙(1例)・別離の涙(1例)・哀別離苦の涙(1例)・永別の涙(1例)・告別の涙(1例)」など、用例は少いけれども多様な「別れ」の涙があることがわかった。

涙を流すとき、「嘘」で流す涙である「空涙」もある。

空涙を流し<sup>そらなみだ</sup>つつ<sup>なが</sup>他<sup>ひと</sup>目<sup>め</sup>を繕<sup>つく</sup>ろふ<sup>し</sup>殊<sup>ほ</sup>勝<sup>ころ</sup>らし<sup>うち</sup>さ<sup>を</sup>心の内ぞ恐<sup>おそ</sup>ろしけれ(『禽獸世界狐の裁判』井上勤、明治17年、『明治初期翻譯尺選』 p.154)

絞り馴れたる虚涙<sup>そらなみだ</sup>に頬を濡らして歯をキリキリと噛み、(『奴の小刀』村上浪六、明治25年6月、明文全89、p.7)

嘘の涙<sup>うそ</sup>かは<sup>なみだ</sup>知<sup>し</sup>らねど袖<sup>そで</sup>を絞<sup>しぼ</sup>りてのお峯<sup>みね</sup>が物<sup>もの</sup>語<sup>がた</sup>り。(「三人やもめ」『薄氷遺稿』北田薄氷、明治27年6月、『リプリント日本近代文学』 p.115)

「空涙」は「悲しくもないのに相手をだまして流す涙」(『日国大』)で、近世の資料にも見られる。「空涙」の歴史は浅いが、明治期には比較的多く用いられている。「空涙(22例)・虚涙(2例)・嘘の涙(1例)」の例がある。次は、「つらい悲しみのために流す涙。また、心をいためて泣くこと」(『日国大』)の涙である「愁涙」である。

と憂ひの涙に眼も昏<sup>くら</sup>く、(『風流微塵蔵』「あがりがま」幸田露伴、明治27年10月、露伴全集8、p.281)

陽部<sup>う</sup>はあくまでもうつくしき絹布<sup>かいこ</sup>ぐる<sup>もんつき</sup>みの紋<sup>もんつき</sup>附<sup>そで</sup>の。袖にもあ<sup>うき</sup>まる<sup>なみだ</sup>憂<sup>ち</sup>涙<sup>ぶき</sup>。乳房<sup>ち</sup>を含む<sup>ふく</sup>おきな子<sup>こ</sup>の。(『妹と背かがみ』坪内逍遙、明治18年、明文全16、p.173)

無念<sup>むねん</sup>至<sup>し</sup>極<sup>ごく</sup>、と愁涙<sup>しうるい</sup>にむせびてしば<sup>こと</sup>言<sup>こと</sup>ぞなき、(『自由太刀余波鋭峰』坪内雄藏訳、明治15年、『明治初期翻譯文学選』 p.233)

奥様はお子方と一度高田へ御帰なされましたが、憂愁の涙<sup>なんだ</sup>は常<sup>たひ</sup>に干<sup>かわ</sup>きもや<sup>な</sup>らなかつたのでせうが(『わらはの思出』福田英子、明治38年12月、明文全84、p.11)

妾空シク、這ノ裡ニ在テ憂苦ノ涙ニ咽ト雖モ、(『泰西活劇春窓綺話』服部誠一、明治17年、『明治文化全集』22、p.513)

「憂い・愁い」の意味は多様ではあるが、たいいて「心配」や「嘆き」の意味として用いられている。まず、和語としての「憂ひの涙(2例)・憂き涙(2例)」の例がある。漢語としての「憂涙」はなく、「愁涙(11例)」(平安時代ごろより)がその役割を担っており、「憂愁の涙(1例)」もある。他に「憂国の涙(1例)・憂苦の涙(1例)・涙の愁嘆(1例)」などの例もあり、涙の豊富さが見て取れるのである。

次の「暗涙」は、「人知れず流す涙。悲運を嘆き、あるいは同情する場合や、無念をしのぶ場合などに多く用いられる」(『日国大』)語である。ひそかに流す涙であるが、色々の意味用法があることがわかる。この「暗涙」は、日本語の歴史の中で、明治期に用いられ始めたものと思われる。『日国大』の初出例が、樋口一葉の『うもれ木』(明治25年)の例となっている。

暗い<sup>をやく</sup>涙は母子の頬を傳ひつつあつた。(『家』島崎藤村、明治43年1月、明文全69、p.286)

愕然トシテ顔色ヲ変ジ雙袖ヲ將テ面ヲ掩ヒ暗涙<sup>き</sup>漣々マタ底止スル所ナシ(『世路日記』菊亭香水、明治17年、『明文全』2、p.356)

臉<sup>まがた</sup>を圧する暗涙<sup>あんるみ</sup>の疾映じたることならん。(『縁蓑談』須藤南翠、明治21年、明文全5、p.402)

思はず暗涙<sup>なみだ</sup>を催<sup>もよほ</sup>したり。(『化銀杏』泉鏡花、明治27年、明文全21、p.85)

和語「暗い涙(1例)」は一般的に用いられていなかったようである。今のところ、島崎藤村の作品に見られるのみである。反面、明治期に漢語として始めて用いられていたと思われる「暗涙(50例)」は多用されている。『日国大』には樋口一葉の『うもれ木』(明治25年)の例が載せられているが、これより早い明治10年代における例も少からずある。また、「暗涙(2例)」のような形もある。しかし、和語であれ漢語であれ近世の資料には今のところ見られないことから、近世にはあまり愛用されていなかった新しい語であったと思われる。

以下では、今までの考察から漏れた異色の涙を提示してみたい。但し、紙幅の関係上、例文すべてを提示することはできないので、涙の種類と作品、作家のみを示すことにする。同じ涙であっても形が違ふ場合はすべて提示し、用例数が多い場合は代表(他作家にも

ある)として1例のみを提示することにする。また、2例以上の場合は、殆んどが提示した作品の以外の他の作品に見られるということを前もっていっておきたい。

「涕<sup>てい</sup>涙<sup>み</sup>」(『倫敦塔』夏目漱石)17例、「涙<sup>るいてい</sup>涕<sup>み</sup>」(『鴛鴦春話』和田竹秋)2例、「涕<sup>なみだ</sup>涙<sup>み</sup>」(『思出の記』徳富蘆花)4例、「溜<sup>ため</sup>涙<sup>なみだ</sup>」(『浮雲』二葉亭四迷)20例、「溜<sup>なみだ</sup>め涙<sup>み</sup>」(『あひびき』二葉亭四迷)1例、「両行<sup>せいらい</sup>ノ清<sup>せい</sup>涙<sup>み</sup>」(『鴛鴦春話』和田竹秋)1例、「清<sup>せい</sup>い涙<sup>み</sup>」(『独行』後藤宙外)3例、「清<sup>せい</sup>き涙<sup>み</sup>」(『幸福者』武者小路実篤)2例、「清<sup>きよ</sup>き涼<sup>すず</sup>しき涙<sup>なみだ</sup>」(『趣味の遺伝』夏目漱石)1例、「清<sup>きよ</sup>浄<sup>じやう</sup>無<sup>む</sup>垢<sup>く</sup>の涙<sup>み</sup>」(『人文子』石橋忍月)1例、「慚<sup>ざん</sup>愧<sup>き</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『沓水鳥孤城落月』坪内逍遙)2例、「慚<sup>ザン</sup>涙<sup>ン</sup>」(『花柳春話』四編、丹羽純一郎)1例、「貴重ノ涙<sup>み</sup>」(『泰西活劇春窓綺話』服部誠一)1例、「眼<sup>そそろ</sup>涙<sup>なみだ</sup>」(『泰西活劇春窓綺話』服部誠一)1例、「坐<sup>そ</sup>涙<sup>なみだ</sup>」(『泣花怨柳北欧血戦餘塵』森田沢)2例、「坐<sup>そ</sup>ろ涙<sup>なみだ</sup>」(『自由艶舌女文章』小室信介)2例、「そぞろ涙<sup>み</sup>」(『牧の方』坪内逍遙)2例、「不<sup>ふ</sup>覚<sup>かく</sup>の涙<sup>み</sup>」(『即興詩人』森鷗外)30例、「男<sup>おとこ</sup>涙<sup>み</sup>」(『汗血千里駒』坂崎紫蘭)2例、「男<sup>おとこ</sup>兒<sup>こ</sup>の涙<sup>み</sup>」(『良人の自由』木下尚江)1例、「女<sup>おんな</sup>の涙<sup>み</sup>」(『走馬燈』饗庭篁村)2例、「母<sup>はは</sup>の涙<sup>み</sup>」(『感情の教育』竹越三又)2例、「悲<sup>かな</sup>母<sup>はは</sup>の涙<sup>み</sup>」(『牧婦』湖處子訳)1例、「女<sup>おんな</sup>性<sup>せい</sup>特<sup>とく</sup>質<sup>しつ</sup>の涙<sup>み</sup>」(『牧婦』湖處子訳)1例、「婦<sup>めかけ</sup>人<sup>ひと</sup>の涙<sup>み</sup>」・「丈<sup>はかり</sup>夫<sup>こ</sup>の涙<sup>み</sup>」(『兆民先生』幸徳秋水)1例、「愚<sup>おろ</sup>痴<sup>ち</sup>涙<sup>み</sup>」(『縁蓑 談』須藤南翠)1例、「愚<sup>おろ</sup>痴<sup>ち</sup>の涙<sup>み</sup>」(『風流微塵蔵』「きくの浜松」幸田露伴)3例、「滴<sup>た</sup>涙<sup>なみだ</sup>」(『佳人之奇遇』東海散士)1例、「誠<sup>まこと</sup>の涙<sup>み</sup>」(『椿姫』長田秋壽)4例、「誠<sup>まこと</sup>涙<sup>なみだ</sup>」(『寒菊』斎藤緑雨)1例、「誠<sup>まこと</sup>実<sup>じつ</sup>の涙<sup>み</sup>」(『かたわれ月』永井荷風)1例、「真<sup>まこと</sup>の涙<sup>み</sup>」(『人道之戰士』正岡藝陽)1例、「真<sup>しんじつ</sup>実<sup>じつ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『伽羅もの語』尾崎紅葉)1例  
「赤<sup>か</sup>誠<sup>せう</sup>の涙<sup>み</sup>」(「吉田兼好」平田禿木)2例、「片<sup>かた</sup>思<sup>おもひ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『金色夜叉』尾崎紅葉)2例、「溜<sup>せき</sup>息<sup>いき</sup>の堰<sup>せき</sup>」(『武蔵野』山田美妙)1例、「鼠<sup>ねず</sup>色<sup>いろ</sup>の涙<sup>み</sup>」(『天うつ浪』幸田露伴)1例、「無<sup>む</sup>言<sup>ごん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『弓矢神』斎藤緑雨)4例、「良<sup>よ</sup>心<sup>しん</sup>の涙<sup>み</sup>」(「小説論」巖本善治)1例、「無<sup>む</sup>限<sup>げん</sup>の涙<sup>み</sup>」(「理想之佳人」巖本善治)4例、「人<sup>ひと</sup>世<sup>よ</sup>の涙<sup>み</sup>」(『人世の別離』星野天知)1例、「靈<sup>たま</sup>魂<sup>たま</sup>の涙<sup>み</sup>」(「骨堂に有限を觀ず」星野天知)1例、「満<sup>み</sup>身<sup>み</sup>の涙<sup>み</sup>」(「薔孤洞漫言」平田禿木)1例、「満<sup>み</sup>胸<sup>きう</sup>の涙<sup>み</sup>」(「みをつくし」馬場孤蝶)1例、「あやなき涙<sup>なみだ</sup>の露<sup>つゆ</sup>」(「みをつくし」馬場孤蝶)1例、「新<sup>あらた</sup>しき涙<sup>み</sup>」(「みをつくし」馬場孤蝶)1例、「斷<sup>つぎやう</sup>腸<sup>たう</sup>ノ紅<sup>こう</sup>涙<sup>なみだ</sup>」(『日本情交之變遷』宮崎湖処子)1例、「斷<sup>つぎやう</sup>腸<sup>たう</sup>の涙<sup>み</sup>」(『鉄仮面』黒岩涙香)1例、「腸<sup>ちやうたう</sup>斷<sup>なみだ</sup>ち涙<sup>なみだ</sup>車<sup>ぐるま</sup>」(『金色夜叉』尾崎紅葉)1例、「渴<sup>かつ</sup>仰<sup>やう</sup>の涙<sup>み</sup>」(「久遠の女性」姉崎嘲風)2例、「甘<sup>かん</sup>露<sup>ろ</sup>の涙<sup>み</sup>」(「預言の芸術」姉崎嘲風)1例、「勇<sup>ゆう</sup>氣<sup>き</sup>の涙<sup>み</sup>」(「戦へ、大に戦へ」姉崎嘲風)1例、「紀<sup>き</sup>念<sup>ねん</sup>の涙<sup>み</sup>」(『良人の自由』木下尚江)1例、「危<sup>あや</sup>惧<sup>ふ</sup>の涙<sup>み</sup>」(『懺悔』木下尚江)1例、「無<sup>む</sup>限<sup>げん</sup>の涙<sup>み</sup>」(『第二軍從征日記』田山花袋)2例、「悲<sup>かな</sup>壯<sup>さう</sup>なる涙<sup>み</sup>」(『第二軍從征日記』田山花

袋)1例、「帰国の涙」(『蒲団』田山花袋)1例、「義理の涙」(『ふらんす物語』永井荷風)1例、「真摯<sup>しんし</sup>の涙」(『嶺雲揺曳』田岡嶺雲)1例、「苦<sup>にが</sup>き涙<sup>なみだ</sup>」(『花外詩集』児玉花外)3例、「苦い涙」(『乳姉妹』菊池幽芳)3例、「啜泣<sup>すずりなき</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『薄命』瀬沼夏葉)1例、「かひなき涙」(『舞ひ姫』荒畑寒村)1例、「烈しき涙」(『舞ひ姫』荒畑寒村)1例、「激<sup>げき</sup>涙」(『私の見た明治文壇』野崎左文)3例、「老の涙」(『乳姉妹』菊池幽芳)1例、「老ひの涙」(『不朽な愛』高須梅溪訳)1例、「貰ひ涙」(『女夫波』田口掬子)2例、「繁き涙の露」(『肉弾』櫻井忠温)1例、「名残の涙」(『肉弾』櫻井忠温)1例、「餘<sup>なご</sup>波りの涙」(『破太鼓』村上浪六)1例、「縁切の涙」(『俠足袋』塚原渋柿園)1例、「不吉の涙」(『萬石浪人』大倉桃郎)1例、「浮世<sup>うきよ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『一滴千金浮世の涕涙』宮崎夢柳)3例、「無益の涙」(『文明花園春告鳥』後編、服部誠一)1例、「白<sup>しろ</sup>き涙<sup>なみだ</sup>」(『新粧之佳人』須藤南翠)1例、「美しき涙」(『幸福者』武者小路実篤)3例、「苦痛<sup>くつう</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『思出の記』徳富蘆花)1例、「最苦最痛<sup>さいくさいつう</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『思出の記』徳富蘆花)1例、「苦<sup>くる</sup>しみの涙<sup>なみだ</sup>」(『草枕』夏目漱石)1例、「心痛の涙」(『阿佛尼』星野天知)1例、「苦悶<sup>くもん</sup>の涙」(『良人の自由』木下尚江)1例、「傷<sup>いた</sup>い涙<sup>なみだ</sup>」(『あた枕』馬場胡蝶訳)1例、「痛ましい涙」(『白鳥物語』野尻抱影訳)1例、「服従<sup>ふくじゆう</sup>の涙」(『思出の記』徳富蘆花)1例、「昔時ノ涙」(『月世界旅行』下巻、井上勤)1例、「無益<sup>なみだ</sup>の涙」(『春情浮世の夢』河島敬蔵)1例、「こら<sup>なみだ</sup>へ涙」(『夏瘦』尾崎紅葉)1例、「執着<sup>しうぢやく</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『末黒の薄』尾崎紅葉)1例、「切<sup>せつ</sup>ない涙<sup>なみだ</sup>」(『西洋娘形気』尾崎紅葉)1例、「窮途<sup>きゆうと</sup>の残涙」(『涙』斎藤緑雨)1例、「脆<sup>もろ</sup>き涙」(『うちわ車』斎藤緑雨)1例、「無数<sup>なみだ</sup>の涙」(『自然と人生』徳富蘆花)1例、「啣<sup>かこ</sup>ち涙<sup>なみだ</sup>」(『新羽衣物語』幸田露伴)2例、「老眼の涙」(『雪紛々』幸田露伴)1例、「相思の涙」(『当世女反古餘稿』幸田露伴)1例、「安心<sup>あんしん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『妖魔の辻占』泉鏡花)1例、「甘<sup>あま</sup>い涙<sup>なみだ</sup>の露<sup>つゆ</sup>」(『手習』泉鏡花)1例、「遣瀨<sup>やうせ</sup>なさの涙<sup>なみだ</sup>」(『芍薬の歌』泉鏡花)1例、「遣瀨<sup>やうせ</sup>なの涙」(『白鳥物語』野尻抱影訳)1例、「情<sup>なさけ</sup>ない涙<sup>なみだ</sup>」(『芍薬の歌』泉鏡花)1例、「果敢<sup>はかな</sup>さの涙<sup>なみだ</sup>」(『芍薬の歌』泉鏡花)1例、「煤色<sup>すすいろ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『星の歌舞伎』泉鏡花)1例、「柔<sup>やわら</sup>い涙<sup>なみだ</sup>」(『声摺』泉鏡花)1例、「発心<sup>ほつしん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『草迷宮』泉鏡花)1例、「恋の涙」(『漂泊』石川啄木)2例、「大きい涙」(『漂泊』石川啄木)4例、「大きな涙<sup>しづく</sup>の滴」(『花園』たそがれ訳)1例、「大粒<sup>おおつぶ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>」(『里の女』瀬沼夏葉訳)5例、「利己の涙」(『一握の砂』石川啄木)2例、「思郷の涙」(『無題』石川啄木)1例、「香<sup>かほ</sup>しい涙」(『見果てぬ夢』

永井荷風)1例、「絶念の涙」(『花園』たそがれ訳)1例、「孤客の涙」(『詩伯ゴールドスミツス』戸川残花著)1例、「失望の涙」(『巨人山』佐藤迷羊訳)1例、「絶望の涙」(『移転』上村清延訳)1例、「思寝の涙」(『滝口入道』高山樗牛)1例、「辛き涙」(『ふらんちえすか物語』石川戯庵訳)1例、「つらき涙」(『女』土岐哀果訳)1例、「外土望郷の涙」(『ふらんちえすか物語』石川戯庵訳)1例、「泣きの涙」(『ふらんちえすか物語』石川戯庵訳)1例、「故郷偲ぶ涙」(『ふらんちえすか物語』石川戯庵訳)1例、「嗚咽の涙」(『ふながかり』馬場孤蝶訳)2例、「無限の涙」(『平和』田山花袋訳)1例、「悼むの涙」(『政界の寧馨児』鷗崎鷺城)1例、「ふしあはせの涙」(『一滴千金浮世の涕涙』宮崎夢柳)1例、「獻歔涙」(『東京新繁昌記』服部誠一)1例、「同感の涙」(『一妙丸』幸田露伴)2例、安堵の涙(『少年行』中村星湖)1例、不平の涙(『少年行』中村星湖)1例

上の例では、「涕涙」と「溜涙」、<sup>ていなるみ</sup>「不覚の涙」がかなり多い反面、残りは殆んどが一例の使用にとどまっている。特に、使用例の少ない涙の表現が多く見られるということからは、作家がその作家独自の非常に独特な表現を用いていたことが窺われる。これらの表現のうち、「への涙」のような連体修飾のものではなく一つの語となっている<sup>るいてい</sup>「涙涕」<sup>ザンル井</sup>「慚涙」は、『日国大』に登載されていない新出語である。このことから、歴史的に用いられていた語のうち『日国大』の見出し語から漏れている語が多数あることも確認できた。このように、近代における感情表現としての「涙」のレトリックは実に多様であったことと、近代文学には、感受性の高い素材の一つとして「涙」が巧く活用されていたということがわかる。

### 3. 重複の「涙」の表現

2章では、主に一つの文に一つの感情を入れて表わした表現を対象に考察してみた。勿論、例えば「悲涙」の場合、「悲歎の涙」つまり「悲しい・歎く」の両要素があるものを「悲涙」のところで考察して「悲涙」の多様性を見ているところもある。これに対して、ここでは一つの文に別の語を用いて二つ以上の感情を込めた特殊な表現を考察の対象にする。これから取り上げる文の中に含まれている涙は、その種類と用例数については2章ですでに考察はしている。ただ、この章では、一つの文に多様な形の涙が表現されている様子を提示してお

きたいのである。例えば、

然し此の時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目になれば、出かねまいと思ふ。苦しい、つらい、口惜しい、心細い涙は経験で消す事が出来る。難有涙もこぼさずに済む。ただ墮落した自己が、依然として昔の自己であると他から認識された時の嬉し涙は死ぬ迄附いて廻るものに違ない。人間はかやうに手前勘の強いものである。此の涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分の為に書生を置いて、書生の為に置いてやつた様な心持になつてると同じ事ぢやないかしら。(『坑夫』岩波書店、p.538)

めめおも女々しと思へどとどまらぬ、涙は同じ涙なれど、最前落せし熱湯は、不肖を悔む慚愧の涙、いま今ふりしぼる此の涙は、愧も忿怒も悔恨も、人の心にとありとある、百八煩惱一つとなつて、五臓六腑を骨もろともにしめぎにかけ、しぼりいだす血の涙。(『杳水鳥孤城落月』坪内逍遙、明治30年、明文全16、p.336)

夏目漱石の『坑夫』と坪内逍遙の『杳水鳥孤城落月』に描写された涙の表現である。下にあげた泉鏡花や櫻井忠温よりも複雑な心情を表わしていると思われる。この両作品が代表的なものといえようが、一つの事柄に対して、性質の異なる実に複雑な感情の涙を盛り込んでいるといえる。このように大部分は、二つの要素が対になっており、三つ四つのものもある。

それを思へば、可懐さの涙、嬉しい涙……でないまでも、遣瀬なさの涙でなければ成らぬのに、(『芍薬の歌』泉鏡花、大正7年7月、鏡花全集18巻、p.249)

……口惜い涙、悲い涙、情ない涙、且つ果敢さの涙と言ふ。(『芍薬の歌』泉鏡花、大正7年7月、鏡花全集18巻、p.249)

これが所謂勝つた者の嬉し涙、負けた者の悔し涙、そして又た幾多戦死者の弔ひ涙なのである。(『肉弾』櫻井忠温、明治39年4月、明文全97、p.31)

上の例のように、一つの文で複雑な心境を感じさせるような涙の表現も多数存在する。

泉鏡花の『芍薬の涙』の例を見ると、涙を流している人は一人であるが、そこに隠されている心情は「口惜しい・悲しい・情ない・果敢ない」という形で同時に四つの感情が重複して現われているのである。これは、登場人物の気持ちに作家が感情移入してその涙の性格を付与しているのであろう。櫻井忠温の『肉弾』は戦争で涙を流す軍人の様子を描写しているものであるが、同じ涙であっても勝者と敗者の涙は異なることを表わしている。このように、登場人物の複雑な心情を一つの文に二つ以上の涙の表現で表わしていることも独特な表現であるといえよう。このような涙の表現も、近代の文学資料には多数用いられている。以下、考察の対象は色々あるのだが、紙幅の関係上、特殊ないくつかの例のみを提示するにとどめたい。

恨の涙、一口惜涙、一泣くに泣かれぬ場の涙、血の涙を流すやうな～(『新浦島』幸田露伴、明治28年1月、露伴全集2、p.226)

其の眼は感謝と喜悅の涙に満され、(『新任知事』永井荷風、明治35年10月、明文全73、p.47)

お八重が目もと恨みと恋の二瀬川満くる潮ぞ涙なる同じ思ひの～(『夜嵐於衣花酒仇夢』鈴木金次郎編、明治19年11月、『リプリント日本近代文学92』p.60)

塙と泥炉との遺物に無念と追懷の涙やまず。(『伽羅枕』尾崎紅葉、明治23年7月、紅葉全集2、p.33)

嬉しくて嬉しくて、嬉し涙が溢れると母子が頓智の空涙を、(『黒白染分韁』高島藍泉、明治18年、明治文化全集21、p.132)

恩愛だの、義理の涙なぞ見る煩ひもない。(『ふらんす物語』永井荷風、明治42年3月、明文全73、p.99)

我がため幾干の人の悩みて如何に悲み悶ゆらんと思ふにつけての懺悔涙と、一口惜涙を眼に持つて、(『新浦島』幸田露伴、明治28年1月、露伴全集2、p.262)

道に女房は今を別れと恩愛の涙に沈みて、(『浮木丸』尾崎紅葉、明治26年1月、紅葉全集5、p.206)

一星が、もの言ふ、怨恨の涙、口惜涙は何んらむ。(『芍薬の歌』泉鏡花、大正7年7月、鏡花全集18巻、p.253)

覚えザワワと喝采して感涙だか愁涙だか涙にむせかへつて打臥すが常(『此処やかしこ』坪内逍遙、明治20年3月、逍遙撰集別冊4、p.338)

哀しき口惜しき憾めしきの涙の外の名の無き涙が何かは知らず～(『ひげ男』幸田露伴、明治29



年12月、露伴全集5、p.388)

頬の肉を引掴んで、口惜涙、無念の涙、慚愧の涙も詮ずれば、ただただ最惜しさの涙の果ては、(『三人の盲の話』泉鏡花、明治45年4月、鏡花全集14巻、p.479)

それはそれは愁い悲しい血の涙を流して、ああ浅ましい事だと、(『二階の客』氷、明治31年8月、『リプリント日本近代文学』p.504)

例文を見ると、類義的な要素もあれば懸け離れたものもあって、多様な様子が見られ、近代文学には感情を込めた涙の重複表現も豊富であったことがわかった。

近代文学における感情を込めた表現は、多種多様であったことがわかった。一部は近代以前の表現を受入れながらも、同時に近代的要素が見られるなど独特の表現も見られた。本稿においては、「涙」を唯の涙の表現ではなく感情を移入した涙のレトリックとして考察しているが、このような試みは研究史上初めてである。

本稿でもそれなりに多くの資料を対象にしているが、さらなる調査をした場合、当然のことながら用例数も変り、ここで取り上げていない新しい用例も出てくる可能性は十分にある。しかし、大きな流れから見れば、この調査の枠を越えるにしても結果としては大差はないと思われる。ともあれ、感情を込めた涙の表現は、近代にはかなり発達していたことが窺われた。

## 4. おわりに

本稿では、近代の文学作品に現われている、感情を込めた涙の表現について考察を行った。普通は「涙を流す・涙が出る」のような表現が多用されているわけだが、もっと登場人物の心情を細やかに描写できるような涙の表現にはどのようなものがあるのかについては、今まで論じられてこなかった。涙のレトリックが実際の文学作品にはどのように現われているのかについての研究が見られなかったのである。

感情を表わす涙の種類としては、『分類語彙表』や『感情表現辞典』に「感涙・血涙・血の涙・紅涙・熱涙・暗涙・うれし涙・悔し涙・空涙・ありがた涙・悲涙・涕涙」などが提示されている。しかし、文学作品にはどのように現われているのかに関する実証的な研究は見られなかったため、本稿では近代文学を通してその実態と頻度を調査し明確化しようと試みた。

調査の結果、『分類語彙表』や『感情表現辞典』に提示されている涙の例が基本的には多用されていたことがわかった。しかし、多用されているにもかかわらず提示されている例から漏れているものもある。例えば、比較的多用されている「哀涙」や「悲嘆の涙・悲憤の涙」は「悲涙」に、「感謝の涙」は「感涙」の範疇に入れてもかまわないと思われるし、「無念の涙・恩愛の涙・同情の涙・懐旧の涙・愁涙」のようなものも多用されていて、ある面では市民権を得ていたものといえよう。

上に提示した例は近代文学においても比較的多用されているものであるが、これと似たような表現の中にも非常に細かく人の心情を把握できるような表現が多かった。すべて提示することには無理があるが、「悲涙」関係のものだけを挙げてみても、「哀嘆の涙・哀悼の涙・哀憐の涙・哀傷の涙・哀惜の涙・哀情の涙・哀痛の涙・悲嘆の涙(悲歎)・悲痛の涙・悲恨の涙・悲哉の涙・悲憤の涙・断腸悲歎の涙・悲恋の涙・悲恋悩殺の涙・悲憤慷慨の涙・大悲の涙・大悲観の涙・悲痛の涙・悲慨の涙・悲傷の涙・悲慘の涙・悲喜の涙・悲哀の涙」のように、登場人物の心情をよく表現していることが窺われた。これらは漢語を伴う表現であるが、和語の中にも表記の違いや類義語の点で多様な様子が見られたことも見逃してはいけない。

このような基本的な表現から外れた少数の独特な表現もかなり見られることと、一つの文に二つ以上の涙を含めることにより複雑な心情を表わしているものも少なくないことも一つの特徴であった。近代文学における感情を表わす涙の表現のなかには、連体修飾の表現ではなく漢語であったにも関わらず『日国大』に登録されていない例も見つかった。「飲涙・怨涙・涙涕・慚涙」は音読みとして用いられていたものであるが、辞書に登録されていないものである。また「血涙・暗涙」は近代の例が初出例であるが、それより早い例が見られるなど、辞書における言葉の登録の問題も見つかった。

表現論の一分野として感情を表わす涙の表現を考察してみたが、近代文学は涙の文学ともいえるぐらい豊かな表現が見られることがわかった。問題は、このような表現が時代別または作家別、文体別によってどのように現われているのかについては考察できなかった。これらについてはこれから課題していきたい。

**【参考文献】**

国立国語研究所(2004)『分類語彙表』秀英出版

世良正利(1970)『日本人の表情』『日本人の性格』朝倉書店

中里理子(2004)『『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて—』上越教育大学研究紀要 第24巻 第1號

中村明(1993)『感情表現辞典』東京堂出版

羅工洙(2011)「近代における『紅涙』について」『日本近代学研究』第30輯、韓国日本近代学会

羅工洙(2012)「近代における数字による涙の修辞」『日本近代学研究』第37輯、韓国日本近代学会

---

논문투고일 : 2013년 12월 10일  
심사개시일 : 2013년 12월 20일  
1차 수정일 : 2014년 01월 09일  
2차 수정일 : 2014년 01월 15일  
게재확정일 : 2014년 01월 20일

---

---

 <要旨>
 

---

## 近代における感情表現としての涙のレトリック

本稿では、近代の文学作品に現われている、感情を含めた涙の表現について考察を行なった。調査の結果、『分類語彙表』や『感情表現辞典』に提示されている涙の例が基本的には多用されていたことがわかった。しかし、多用されているにもかかわらず提示されている例から漏れているものもある。例えば、比較的多用されている「哀涙」や「悲嘆の涙・悲憤の涙」は「悲涙」に、「感謝の涙」は「感涙」の範疇に入れてもかまわないと思われるし、「無念の涙・恩愛の涙・同情の涙・懐旧の涙・愁涙」のようなものも多用されていて、ある面では市民権を得ていたものといえよう。

上記の例は、近代文学において比較的多用されているものであるが、これと似たような表現の中にも非常に細かく人の心情を把握できるような表現が多かった。他に基本的な表現から外れた少数の独特な表現もかなり見られることと、一つの文に二つ以上の涙を含めることにより複雑な心情を表わしているものも少くないことも一つの特徴であった。近代文学における感情を表わす涙の表現のなかには、連体修飾の表現ではなく漢語であったにも関わらず『日本国語大辞典』に登録されていない例も見つかった。

表現論の一分野として感情を表わす涙の表現を考察してみたが、近代文学は涙の文学ともいえるぐらい豊かな表現が見られることがわかった。これからも別の観点で「涙」の表現について考察していきたい。

## The Emotive Rhetoric on Tears in the Meiji~Early Syouwa

This paper investigates the status and frequency of these words which are used in the modern literature. The result of this study shows that these examples of tears are basically in heavy usage. However, it can be said that some of them got out of the examples on these dictionaries. For example, we can find the heavy usage words, such as 'piteous tears(哀涙)' and 'heartache tears(悲嘆の涙)' and tears of indignation(悲憤の涙) which can be categorized as 'tears with grief(悲涙)', and 'thankful tears(感謝の涙)' that can be classified as 'moved tears(感涙)'. We can find the heavy usage of 'chagrined tears(無念の涙)', 'tears of gratitude and love(恩愛の涙)', 'tears in sympathy(同情の涙)', 'tears of reminiscent(懐旧の涙)', 'tears in deep grief(愁涙)', which obtain citizenship in some senses.

These examples, which can be figured out the human sentiment with much circumstance, can be quite seen in the modern literature. As for the rest, a few exceptional and unique examples can be seen. We can find more than one 'tears expression' in each sentence, which tend to explain the delicate and mixed feelings. That is, within the emotional expressions on the modern literature, we can find the special example which is not registered with 'Japanese Vernacular Dictionary(『日本国語大辞典』)'. From this research on tears expression as phraseology, in conclusion, the expression of the modern Japanese literature has deeply abundant power. I insist that it can be labeled as a 'literature of tears'. Last of all, I will continue to investigate the expression of tears from other perspectives in the further study.